



昭和 36 年における協会活動を顧みて

副会長 俵 信 次*

鳥兔勿走、昭和 36 年も方に暮れようとしている。この 1 年間におけるわが国鉄鋼業界の趨勢を回顧して見ると、鉄鋼の需要が急激に増加してきたことを背景に、生産は順調に拡大基調を辿った結果、本年 3 月以降月産ペースで英国を抜いて世界第 4 位に躍進し、更に第 3 位の西独に迫るといつた勢で、世界でも類例のない発展を遂げている。なお業界は、政府の所得倍増計画に伴う 45 年度粗鋼生産 4,800 万 t の達成を目指して、大規模な設備計画を進めている。ただ最近における政府の景気抑制策は鉄鋼業界の上にもおよび、設備投資の一部削減を余儀なくせられるの懸念がないではないが、大局より見れば今後も引続き上昇の歩調を辿って行くものと思われる。

この間にあつて、わが日本鉄鋼協会は這般の情勢の反映を受けて活発に事業運営の歩を進め、極めて明るく経過したことはまことに喜ばしい限りである。今年における協会の事業活動並びに運営の跡の主なるものを回顧して見たい。

1) 春季大会の開催 本年の春季大会は 4 月 3 日から 5 日まで早稲田大学を会場として東京において開催された。参会者 400 名を超え、講演は 174 件の多きに上つた。この大会に際し表彰式が行われ、角野尚徳氏に渡辺義介賞牌、里井孝三郎氏に服部賞牌、菖蒲正俊氏に香村賞牌、森一義氏に俵賞牌、横山均次氏に渡辺三郎賞牌、また井上誠氏ほか 14 氏に渡辺義介記念賞が贈られた。なお恒例により賞牌受領の各氏に記念講演をお願いしたが、何れも平素の蘊蓄を傾けての有益な講演で、聴講者一同に深い感銘を与えた。

また本年より初めて鉄鋼技術共同研究会の部会報告講演会を実施することとなり、特殊鋼部会については石原善雄氏、計測部会については菊池浩介氏、調査部会については三井太信氏とそれぞれ各部会長から詳細な報告講演が行なわれ、好評を博した。

2) 秋季大会の開催 秋の大会は、東京以外の支部所在地方で行なわれる例となつているが、東北地方ではこれまで開催される機会が少なかつた。然るに本年は恰も本会と関係の浅からぬ秋田大学鉱山学部の創立 50 周年に当り、盛大な記念祝典が行なわれるので、その記念行事の一環として大会を開催するようとの懇請を受けて、10 月 17 日から 21 日まで 5 日間に亘り秋田において開催された。この大会において発表された講演数は 156 件、出席者も 400 名を算し、祝典に伴う諸行事と相俟つて甚だ盛会であつた。鉄鋼技術共同研究会の第 2 回部会報告講演会も同時に開催せられ、鋼材部会分科会については主査井上勝郎氏、同線材分科会については主査菖蒲正俊氏、新技術開発部会直接還元分科会については主査代理雀部高雄氏よりそれぞれ研究成果の報告講演が行なわれた。また別に公開講演会が催され、「科学技術の進歩と人間形成」と題し東京大学総長茅誠司氏より、「わが国製鉄業の展望」の題下に本会会長浅田長平氏よりそれぞれ甚だ有益なる講演を拝聴することを得た。

3) 特別講演会の開催 海外の知名な学者、研究者など来日の機会に、特別講演会を開催してこれらの方々から直接講演を聴講することは技術交流上まことに望ましいことであるが、本年においてはつぎの 3 氏より、それぞれ興味深き講演を拝聴することができたことは甚だ俵せであつた。

I. 米国シカゴ大学教授 C. S. Smith 博士—金属の爆発変形について。(5 月 19 日 日本化学会講堂において)

II. 瑞西チュウリッヒ大学教授 R. Durrer 博士—溶鉱炉によらざる製鉄法について。(5 月 24 日 日本相互ホールにおいて)

III. 瑞典王立ストックホルム工業大学教授 Bo Kalling 博士—カルド酸素製鋼法について。(6 月 13 日 大和証券ホールにおいて)

4) 会誌「鉄と鋼」の発行 協会の事業として会誌の発行は最も力を注いでいる事業の一つであるが、本年において一層内容の充実を計るとともに紙数を増加した。また鉄鋼技術共同研究会の研究成果を纏めた報告書を、「鉄と鋼」増刊号として発行し、会員全員に洩れなく配布することは昨年より初めたことであるが、本年においても少なからぬ犠牲を払つてこれを継続し、

第 8 号 鋼材部会厚板分科会報告書

第 13 号 鋼材部会線材分科会報告書

を発行した。今後においても、共同研究会の研究進展に伴い、その成果を毎年数回増刊号として刊行の予定である。

5) 「鉄と鋼」海外版の発行 会誌「鉄と鋼」に掲載された論文を摘録編集し、「Tetsu-to-Hagané Abstracts」という名称の下に昭和 27 年以來毎年 1 回発行し、これを海外諸国の関係方面に送り技術交流の資に供して来たが、

* 太平金属工業株式会社社長、工博

これは第 10 号をもつて打切り、本年からこれに代えて新たに“Tetsu-to-Hagané Overseas”を発行することにした。これは単に論文の摘要のみならず、主要論文は全文を掲載し、更にわが国鉄鋼界のPRともなるべき幾多の資料を付け加えて年 4 回発行のものとする予定であり、すでに第 1 巻第 1 号および第 2 号の刊行を終り、欧米諸国はもとより、東南ア地方、中南米地方、ソ連圏内の諸国などの関係方面に送った。

6) 規格原案の作成 JIS 規格の制定に関しては、従来本会としてもその協力を措まなかつたことであるが、本年は工業技術院よりの委託により、つぎの 3 件につき工業標準原案を作成することとなり、それぞれ委員会を設置して案の作成に当ることになった。

- | | |
|-------------------|-----------|
| (1) 鋼の火花検査方法 | 委員長 石原善雄氏 |
| (2) 鋼の脱炭層の深さ測定方法 | 委員長 松下幸雄氏 |
| (3) 鉄鋼の直読式発光分光分析法 | 委員長 池上卓穂氏 |

7) 鉄鋼便覧の改編 昭和 33 年以来改編委員会(委員長 塩沢正一氏)の手により鋭意編集に努力してきた鉄鋼便覧の改編も、本年に入つていよいよ結実して完成の段階に入り、近く旧版に倍する大便覧となつて現われ、斯業に従事する技術者にも、研究に携わる者にとつても好参考書となるべきことを疑わない。

8) 原子力委員会の活動 原子力工業の発展に対応する鉄鋼生産技術の育成に必要な調査研究を行うことを目的として昭和 32 年に発足した本委員会は、爾後度々会合を開いて調査研究を行ない、またその内に設けられた文献専門委員会は撓みなき努力をもつて関係文献の蒐集研究に従事している。

9) 特別資金による事業 八幡製鉄渡辺記念資金による事業としては、4 月の総会において渡辺義介賞牌および渡辺義介記念賞の贈呈を行なつたほか、九州、北海道、北陸、関西の各支部において渡辺記念講演会を開催し、また海外出張の本会々員に対しつぎの通り鉄鋼関係事項の調査を委託し、調査委託金を交付した。

- | | |
|---|--------------|
| (1) アメリカにおける各大学の金属関係学生教育 | 東京大学教授 松下幸雄氏 |
| (2) 欧米諸国における金属材料として鉄鋼料の強度に関する
総合的研究組織およびその研究問題 | 東北大学教授 横堀武夫氏 |

また石原研究資金からは、鉄鋼技術共同研究会や原子力研究委員会の運営補助金を支出したほか、つぎの通り石原研究奨励金の交付を行なつた。

- | | |
|------------|-------------------------|
| 鋼の脱酸に関する研究 | 東京大学工学部冶金学科 佐野信雄氏、塩見純雄氏 |
|------------|-------------------------|

10) 鉄鋼技術共同研究会の活動 鉄鋼技術共同研究会は、通産省重工業局、日本鉄鋼連盟および本会の共同組織体であるが、製鉄、製鋼、鋼材、特殊鋼、熱経済技術、品質管理、調査、新技術開発、計測、および鉄鋼分析の 10 部会に分れ、各部会はまたそれぞれ数多の分科会に分れて研究事項を分担、引続き活発な調査研究を行なつているが、その研究の成果は前述の通り会誌「鉄と鋼」の増刊号として編集刊行し、または春秋の大会に際し報告講演会を開催して報告を行なつた。

協会の事業活動につきここにその概要を申し述べたが、協会の活発な事業活動を反映して引続き入会の希望者が多く、年々会員は増加の一路を辿つている。殊に本年に入つてからその傾向いちじるしく、昨 35 年末における会員総数は約 7,000 名であつたが、最近においては約 7,600 名に達している。これすなわち協会の躍進を物語るものと信じ喜びに堪えない。

なお鉄鋼業界発展に即応して、当協会を一層強力のものとする目的で本年春以来企画委員会において協会強化策について種々検討されて来たが、昨今漸く具体案がまとまり来年早々にも実行に移される運びとなつたことは誠に御慶のいたりである。担当の方々の熱意に敬意を表する次第である。

最後に特記したいことは、本会名誉会員であり、石原研究資金の寄贈者である石原米太郎氏が、この年 5 月 6 日に病を得て俄に逝去されたことである。ここに更めて追悼の意を表し、御冥福を祈る次第である。